
数学科60周年記念

数学科60年の歩み、その先へ

MTH60TH
DEPARTMENT OF
MATHEMATICS

日本大学理工学部数学科

想像力と創造力がひらく新しい世紀

— 数学科創設 60 周年によせて —

理工学部 学部長 岡田 章

数学科創設 60 周年、おめでとうございます。理工学部を代表いたしまして、心よりお祝い申し上げますとともに、この長い歴史を築き、また支えてくださいました卒業生お一人おひとり、さらには歴任教職員のみなさまには、感謝と敬意を表したく存じます。

本学部に数学科が誕生したのは 1959 年のことです。前年には、物理学科の設置とともに工学部が理工学部へと改称されています。当時、数学科はそのほとんどが国立大学にしかなく、数学科の教育手法は国立大学型が唯一と考えられていた時代でした。そうした風潮の中、国立大学とは異なる私立大学の独自性を追求し、「論理、抽象でなく具体を重んじる」という、思い切った教育方針が試みられたことは驚くべきことです。この創設時メンバーの意気軒昂たる姿勢は、現在もなお脈々と受け継がれているように思います。

数学科が創設された年、国内ではメートル法が完全実施されました。わが国の科学技術が、国際社会の一員として名実ともに新しいフェーズへと歩を進めた象徴ともいえる出来事でした。そして、まさに時を同じくして誕生した日本大学理工学部数学科は、日本の科学技術の発展とそこに資する人材の育成という使命を、創設当初から担っていたといえるのです。

理工学部は 2020 年に 100 周年を迎え、新しい世紀へと歩を進めることとなります。その歩みにおいて、数学科は基盤学科のひとつとして、ますます大きな存在感を示すと期待しています。

日進月歩の科学技術の世界にあって、社会をリードする科学者・技術者となるには、目の前の課題をこなしていくのはもちろんのこと、30 年先の社会を見据える想像力と創造力が肝要であると考えます。私は学部長に就任して以来、【CST × DREAM】を教育のスローガンとして掲げています。CST（理工学部の略称）でユメを実現するという字義通りの意味のみならず、本学部の学生として修得してほしい 7 つの能力—科学（Science）・技術（Technology）・工学（Engineering）・芸術（Arts）・数学（Mathematics）の 5 要素とこれらを礎として行うデザイン（Design）、そしてその先にある具現化（Realization）—



とこれらを適切に涵養する教育力のある学部（College）であるというメッセージを、8語の頭文字のアナグラムであらわしています。それぞれの要素が独立するのではなく、関連しあってシナジーを起こし、デザインという創造的な行為を経ることで、「もの」さらには「こと」を創出できると考えています。

このスローガンからも明らかのように、私は、本学部の教育、さらには今後の科学技術の発展のための「要」として数学を位置づけています。IoT（モノのインターネット）からIoH（ヒトのインターネット）へと社会が進みつつある中、数学的思考法はもちろんのこと、情報を適切に処理し読み解く力を身につけることは、数学の専門家に限らず、理工系の人材としてより不可欠なものとなることでしょう。その意味で、数学科の果たす役割は、本学部における研究・教育において、さらにはわが国の中等教育——卒業生の多くが教員として中高校生の教育に携わり、大きな教育的貢献を果たしていることは誇るべきこと——において、今後ますます大きくなると確信しています。

60年は人間でいうところの還暦にあたります。数学科にとっての新たな章の幕開け、そしてその慶びを、学部の教職員一人ひとりと共有し、また一方で、いまいちど歴史と伝統の重みを感じつつ、私たちはこれからもひたむきに、「ものづくり」そして「ことづくり」を通して社会に貢献できる「ひと」を育てて参ります。

【プロフィール】

昭和 52 年 3 月 日本大学 理工学部 卒業。

昭和 54 年 3 月 博士 前期課程 修了、昭和 57 年 3 月 博士 後期課程 単位取得 退学 の後、竹中工務店、日本大学 理工学部 助手、専任講師、助教授を経て平成 19 年 4 月から教授。

平成 26 年 10 月から平成 29 年 9 月まで 理工学部 次長（駿河台校舎）。

平成 29 年 10 月から 理工学部 長。

専門・研究分野は、建築における軽量構造や空間構造の構造デザインなど。

幸運な誕生を引き継いで文化の発展に 貢献を

理工学部校友会 会長 木田 哲量

「数学リテラシー・ランキング 2015 版 (OECD 主権)」によれば、日本の 15 歳児童の数学ランキングは世界第 5 位で有り、科学は第 2 位です。これは、円周率の計算や行列式の発見など世界の著名な数学者と並ぶ江戸期の和算学者関孝和に代表される日本の幾何学を初めとする数学水準の高さを証左しております。



1959 年 4 月に創設された日本大学理工学部数学科が本 2019 年に創設 60 周年をお迎えられましたことに謹んでお祝い申し上げます。世界に誇る日本産業の最先端技術をコンピュータによる技術開発を成して製造・品質管理の分野にも応用されて活躍されております優秀な数理工術者を数多く輩出し続けておりますこと、そして次世代の高等数学教育を担う実に多くの教育者の育成に貢献されましたことに心から敬服申し上げます。特に、高等学校の先生方による優れた進路指導が母校の優秀な後輩育成となっていることに感謝しております。これらは全て、創設当初の世に誇る著名で豪華な教授陣ならびに継続して現在も高く評価されている極めて優れた研究成果をお持ちの教授陣がご活躍されていることに裏付けされています。

理工学部校友会においては、「桜数会」と称する部会校友会が数学教室と共催して、数学科創設 50 周年行事などを行っています。これまで通りの豊かな見識と実践力で理工学部校友会をより一層発展させて下さいますようお願い申し上げます。

数学科創設の偉大な先覚者であります宇野利雄先生は、日大新聞に次のような回想を記載されております。『数学科発足にあたり、将来の計算機時代に備えて「リレー式計算機 FACOM128B (1959 年製)」を採用した。この機種は低速であるために経過観察ができ、3 アドレス方式機械言語の簡便のためプログラム修正が簡便なために研究開発に楽につかえた。この計算機、学生の数値解析の教育に役立った。また、航空機 YS11 設計における片肺飛行運動解析を成した。』この快挙は数学科創設と同時に実体物の数値解に最先端のコンピュータを利用できる幸運を有していることによります。なお、この計算機は世界最古級の稼働コンピュータとして保存されているとのこと。

20 世紀後半からは、コンピュータが全ての理工学・医学・社会科学を飛躍発展させて

史上類を觀ない繁榮をなしました。しかし、そのことが地球上の生物の生存を脅かす自然環境破壊を惹起させ、今なお進行させつつあります。例えば、二酸化炭素の排出増加による地球温暖化、深刻なマイクロプラスチックによる海洋汚染などがあります。今に生きる世代が努力して、健全で持続性ある生物生存環境を次世代に引き継ぐ責務がありましょう。さらにまた、台風や局地集中豪雨による人命救助と社会基盤の減災のためにも地球気象現象データのリアルタイム解析および情報周知も急務です。

この技術開発を担う指導者こそが、日大理工数学の卒業生であることを信じています。これからも、一層の発展をなし続けられますことを祈念申し上げまして「日本大学理工学部数学科 60 周年記念」のお祝いの詞とさせていただきます。

【プロフィール】

昭和 42 年 3 月日本大学理工学部土木工学科卒業

昭和 44 年 3 月日本大学大学院工学研究科修士課程建設工学修了

昭和 44 年 10 月日本大学採用

平成 2 年 4 月日本大学生産工学部教授

(土木工学科主任・学生担当・学部次長)

平成 24 年 7 月日本大学定年退職

平成 29 年 4 月理工学部校友会会長・日本大学校友会副会長

数学科 60 周年を迎えて

～数学科創設 100 周年につなぐ～

数学科 主任 平田(河野) 典子

日本大学理工学部数学科は 1959 年 4 月に駿河台の地に誕生し、このたび 60 周年を迎えさせていただくはこびとなりました。これもひとえに数学科を支えて下さいました皆様のお蔭と存じます。厚く御礼を申し上げる次第です。

世の中に役立つ事実を簡単には説明しにくい場合も少なくない「数学」に対して、「数学こそが真理を究め、また未来を確実に照らすために不可欠な学問である」と見抜いた先人の慧眼に、そして数学科創設の実現に向け奔走くださった方々に、深い敬意を表します。今日では珍しくない純粋数学と情報数学の融合を、当初より数学の自然な顕れと捉えた先駆的洞察のもと備えられた FACOM 計算機、Knopp 文庫を核とした世界に誇る数学科図書室、そして気鋭の教員と学生が、共に礎を築いて参りました。



自然科学において、数学ほど厳格な論証を要求する学問は多くありません。一つ一つ綿密に組み立てられた体系の美しさ感動する者が集い、自由闊達な議論をのびやかに交わしながらそれぞれの研究を紡ぐ場であること。大きな夢を描いてひたむきに感性を研ぎ澄ませ、夢を叶えるために考え抜く場であること。この志のもとに東京の中心に位置する駿河台を、真の数学を育むことの出来る地にせんとする揺るぎない願望がみなぎります。

歴史の彼方より人類を魅了し続け、なおかつ現代の科学の根幹を支えてきた数学の最先端を担うために、ここに学び舎を築き、学び手と共に数学科は学問のひろがり希求して参りました。永きにわたる地味な積み重ねが突然に華開く瞬間の喜びは何ものにも代え難いですが、我が数学科により得られたそのような成果は、数学を数学たらしめるにふさわしいものと自負しております。

60 周年という還暦の年、数学科の初志を鑑みる節目を迎え、在学生・卒業生・教員共々、互いを信じ合い支え合いながら、数学科創設百周年に向けて未来を担って参りたいと考えております。

皆様より一層のご指導を賜われますれば、誠に幸甚に存じます。

数学科 60 周年を迎えて

桜数会 会長 佐藤 信 (昭和 59 年 3 月卒 22 回生)

数学科創設 60 周年、誠におめでとうございます。

前会長の故内藤肇氏 (8 回生) のご尽力により創設 50 周年記念式典が平成 21 年 2 月に盛大に開催されました。その翌年、平成 22 年に会長を引き継いで、本年の創設 60 周年を目標に、桜数会の諸先輩を初めとする校友の皆様方、そして数学科の先生方のご協力をいただきまして、約 9 年間にわたり校友会の諸活動を進めることが出来ましたことを、心より感謝申し上げます。



学生時代は幹事として 4 年間、毎年 9 月に学生主催で学部生・院生・先生方の約 140 名 (バス 3 台) が参加し 3 泊 4 日の数学科合宿を開催しました。学年を越えての交流、講義以外での先生方との交流を深めることができ、心温まる思い出となりました。

卒業して 30 年以上の現在、学生当時に講義を受けた先生方の最終講義を聴講させていただくたびに、先生方のご功勞に感謝の意を表し、数学科で学んだ日々を感慨深く、感じております。

大学の使命とは何か。それは未来に向けて、多くの分野で社会貢献できる人材を育成することであると思います。

理工学部新校舎「タワー・スコラ」も昨年完成し、本年平成 31 年 (2019 年) に数学科も還暦を迎えました。もう一度生まれ変わる決意で 70 周年、そして 100 周年に向けて在学生・卒業生・先生方と心を合わせて、数学科のさらなる飛躍・発展に向けて努めてまいります。

最後に、ご多忙の折、本 60 周年記念誌の編集作業に取り組んでいただきました記念誌委員の皆様方には、心より感謝申し上げます。